

【基調講演】

研究に基づく少年非行防止プログラム

渥 美 東 洋

社会安全・警察学研究所 所長

京都産業大学大学院法務研究科 客員教授

目 次

- I 「社会復帰の衰退」と犯罪学大理論（グラント・セオリー）の不毛への自覚
- II 経年研究を中心とする発達理論（社会心理学、精神医学）によるトリートメント・サービス・プログラムの成功
 - 1) < 犯行・非行一動機（行為者側） > × < 周辺、文化・社会、相互状況（条件） >
 - 2) 犯罪・非行因果関係論（etiology）に基づく現実分析
- III 他人への不安感（体感治安）を生む行動（= antisocial）の予防
- IV 深刻で重大で暴力的で慢性的な非行・犯行の進行の予防
- V 総合・統合研究、MSTによる知見に基づく非行・犯罪予防
 - 抑止、事前対応のシステム = Criminal Justice（マイクロ犯罪学の応用）の充実した改善

それでは、レジュメに従いまして話をいたします。お手元にごございます資料にお目をお通しになりながら、その都度リファアいたしますので、つたない報告をお聞きいただきたいと思います。

I 「社会復帰の衰退」と犯罪学大理論（グラント・セオリー）の不毛への自覚

1975年にアメリカ合衆国でミシガン大学のフランシス・アレン教授が、「社会への更正立ち直りの概念の崩壊」¹⁾という論文を書き、それ以来、一体どのようにわれわれが羅針盤を持ちながら犯罪問題に取り組んでいったらいいかわからないような状態が生まれました。それまでは、刑法というのは、反面、社会復帰と言いますか、そういうものを理念とするという前提でありましたけれども、その目的は、諸国において、少なくとも OECD の諸国において地に落ちてしまったわけがあります。

そのときに、それを支えていた刑法上のいろいろな大きな理念、それから、犯罪学、社会学の大きな理念というものによった種々の提案や議論がございました。学問もございました。しかし、それは、ほとんど犯罪を抑制する具体的な効果を持たない。むしろ犯罪を誘発するような結果にも至っていないわけではないという論文が、フランシス・アレンによって出されました。これは大変な脅威でありました。

それとともに、アメリカ合衆国において開かれておりましたディパートメント・オブ・クリミノロジー——老人になりまして、発音が十分でないのをお許しください——日本で言う犯罪学部というものは、ユニバーシティ・オブ・フロリダを除いて全部なくなりました。これはかなり深刻なことでございます。

1) Francis A. Allen, The Decline of the Rehabilitative Ideal : Penal Policy and Social Purpose (New Haven, CT, Yale University Press, 1981) 所収。

それに代わって、後に、何十年かたちましてから多くのところで生まれましたのが、クリミナル・ジャスティスという研究所や学部でございます。このクリミナル・ジャスティスというものは、そのような経緯を経て生まれてきたことから分かりますように、いわゆる大理論、大きな理論、グランド・セオリーというようなものに基づくものではございません。ある意味では法律学というものも含めてそうですが、形而上学に基づいて理論を積み重ねてまいりました。その形而上学の終焉とでも言うべき時期をわれわれは迎えたのであります。

形而上学について種々議論する時間はございませんから、それはそれとしておいて、従来、われわれの学問の中心に据えてきたものが、バックボーンが壊れていき、次に、一体人間にとって的確な指針となる学問やサイエンスというものはどういうものでなければならないかを深刻に悩まなければならない時期に入ったのです。日本では、それについての意識はほとんど、現在でもないようです。

私は、もともと犯罪に関して、一番最初、政治学者として始まりました²⁾。犯罪に関する問題を中心として、法学部に籍を置き、刑法や刑事訴訟法を中心としながらものを考えてまいりましたが、この分野における理屈も根本的に変えなければなりません。そのためのいろいろな試みをいたしましたけれども、なかなかそれは行き渡らないのです。

それと同時に、犯罪者に誰もなりたくないです。犯罪者の置かれている惨めな状態というものへの配慮というものも十分になされなければなりません、いろいろなことを考えて。これはたまたまですけれども、私の若いときの友人がこの分野の草分けですが、子どものときからの友達です。ユニバーシティ・オブ・ペンシルベニアのウォルフガンという学者です。彼がこのような道を切り開きました。

それは、人が生まれ落ちてからある段階に至るまで、どのような成長を遂げながら、犯罪にかかわりあいがいないとか、犯罪にかかわりがあるとかというのは、どういう条件で生まれてきて、どういうプログラムを提供すればそうなるか、ならないかというのを、30年にわたって、同じ時代に生まれた人間を捉えて研究をしたのであります。それが一番の中心です。それを私は、ここでは「経年研究」と申しております。

その経年研究の成果というものを、人に対してと、それから社会に対してと、場所に対して当てはめて研究する、こういう研究が生まれてきました。それを、場所についての——プレイス、プレイスと申しますが——場所についての研究と言ったりします。

この間サッカーで——私も大学までサッカープレーヤーでしたからサッカーのことを思い出しますが——本田くんが、ああいうところで本当に1点取ってくれました。やったなと思いましたけれども。しょうがないときには真ん中蹴るのです。それ以外ないです。そういう人が日本のなかに生まれてきたと。なまじっか、うまくやろうというやつは相手の動きを考えるのですが、そんなことを考えることはありません。自分の思いきりやればいいという青年がわれわれの後輩に生まれてくれたというので喜んだのです。これは、彼の個人の資質と、それから、それまで育ててくれた周りの条件と、それからあの試合の、あの場所で生まれたわけです。そのなかで、いろいろな人がいろいろ活躍します。それからこの間、負けていた試合で阿部がホームランを打ちました。それもやはり同じような状況です——たまたまこれは私に関係あるものばかり考えてお話をしていますけれども——。

人間が犯罪をおこなう場合というのは、その人と、それから、その周りのいろいろな周辺の事情です。これは「エコロジー」というふうに言えば一番いいのだと思いますが、それを状況で捉えるという言い方をしたりするので、「状況犯罪学」とか「環境犯罪学」とかと言われます。本来から言えば、エコロジカルなものと、それから、そこにいる、DNAを持っていて個ですね、この2つの、非常に複雑な絡みのなかからいろいろな問題が起こります。いいことも起こりますし、まずいいことも起こるということを、われわれはきちんと知らなければならないということになります。

2) 渥美東洋先生インタビュー「法とは何か」神山法学（京都産業大学法務研究科）第1号3頁以下参照。

こういう分野で、そのときに最も合理的な人間（reasonable person）というものを考えて、理論化されてきましたが、これも私に言わせれば、まだまだ十分でないという気がします。カントなんかと同じように、人間が合理的な人間として生きるということを前提として、それをどうやってそのなかに生み出していきながら人間が社会をつくっていくか。だから、彼に言わせれば、自由というのは、そうつくり上げられた人間の営みであって、自然にそこに出来上がったものではないということは、よく彼らは分かっているわけです。それを実際の自然や現実から切り離してものを考えてきたところに西洋近代の人間観の根本的な間違いがあるということを、この分野の出来事がはっきり示しています。そこから根本的に考え直すことをし始めたわけです。

ヴォルフガンも私も、第2次世界大戦の深刻なソ連の進攻のなかで、当時の満州で、2人とも大変な苦勞をしながら、彼も一緒に日本へ来て、日本から今度、彼はアメリカへ行きまして、そしてアメリカで立派な学者に育っていきました。こういう深刻な人間の営みのなかでの状況というものは、的確に現実と合わせて捕まえなければ捕まえることができませんので、それを基本としてものを考えるという考え方が、40年ぐらい前から、アメリカとイギリスで生まれてまいりました。それがここで申し上げる社会安全論であり、実際の分野におけるものがポリシーシング、警察学です。

そのいきさつを若干申し上げて、われわれはこれからどうやって進んでいったらいいのかということについて——畳の上で水練をしておりますものが説明をするのですから大したことはお話しできませんけれども——、ここの研究の将来に向かって、歴史的な役割を与えられたことを、緊張しながら、そういうシチュエーションのなかでお話を申したいと思います。

先ほど来、日本の犯罪総数は減っていると言われました。これはOECDの国、全部減っています。ところが、ある一種の犯罪については増えているとおっしゃいました。これはどういう関係にあるのだろうかということもかなり難しい問題です。

ゲーリー・ベッカーというシカゴ大学の教授が——彼は経済学の教授ですが——経済人間というものを基本として合理的な人間のチョイス（rational choice）で犯罪は起こるんだという、非常にボールドな——英語で表現しますが、あまりいい意味ではありません——議論を展開いたしました。この理論によれば、ただただ、経済がうんと悪くなっていったらば犯罪は多くなるわけです。何とか経済合理的な人間で行動しようとするんだったら、今の状態をうまく生き抜けるために多くのものを獲得するはずですから。

ところが、調べてみますと、大恐慌の時代がそうだったことが今では明らかになっていますが、2000年前後になっても、世界全体で犯罪総数は減りました。これは、経済の衰退と、デフレと一致します。経済のデフレは犯罪を減らすというのは、どうも相関関係にあるようです。ところが、他方で、先ほどもお話になっておりますように、人を殺す犯罪であるとか、性犯罪であるとかというものは反復しますし、なかなか減りません。これは合理的な条件を与えてそれを防ぐような罰を与えたり、あるいは抑止的な手段を講じてもなくなるらない犯罪です。したがって、犯罪というのは、その場所でもそうですし、人間でもそうですし、その人間関係のそれぞれによって違って現れるということを、よく知っていないといけません。そのために膨大な研究をしなければならないし、たくさん積み重ねていかなければなりません。その一步を、われわれはここから踏み出さなければならないということになります。

先ほども申し上げましたように、フランシス・アレンが、もう本当に犯罪学は駄目だ、刑法は駄目だ、刑法の崇高な社会復帰理念なんてものは役に立たないという論文を書き、アメリカ合衆国最高裁判所もそれを捨ててしまいました。それに代えて出てきたのが厳罰主義です。私は被害者学をやっている、被害者センターをやっていますが、被害者の地位を上げられたら、それは非常に結構です。しかし、それにより、被害者側の立場を不幸な犯罪者の側にそのままぶつけられるというかたちになるような傾向を生むようになったのです。社会の責任はどこかに行ってしまったのです。その結果、実際の行為に似合わない、重たい刑というのが課されるようになりました。私はこの考え方に、いろいろな、再犯を生み出す大きな原因があると思っています。

レジュメ（部分）

- I 1975年の合衆国での「社会復帰」の衰退（特にフランシス・アレン）
 犯罪学大理論（グラント・セオリー）の不毛への自覚
 大理論（又はマクロ犯罪学）のいくつか
 ◎1938年 Sellin & Merton の＜文化衝突＞
 ◎1939年 Sutherlandの学習プロセス論
 ◎1942年 Shaw & Mckeyの社会混乱理論
 ◎1968年 Beckerのラベリング理論
 ◎1969年 Hirshの社会コントロール理論
 社会化の絆 social bond
 愛情（着） attachment
- II 経年研究を中心とする発達理論（社会心理学、精神医学）によるトリートメント・サービス・プログラムの成功
 ピッツバーグ・ケンブリッジ両大学共同研究（LoeberとFarrington）
 米国OJJOPの研究（Howell）
 ◎先行（ペンシルベニア大学のWolfgang）
 1)＜犯行・非行一動機（行為者側）×周辺、文化・社会、相互状況（条件）＞
 リスク要因とプロテクティブ要因の発見
 2)犯罪・非行因果関係論（etiology）に基づく現実分析
 マイクロ犯罪学、エヴィデンス・ベースト政策、プログラムの開発
 ＜犯罪・非行と社会性（sociability）の開発＞
 社交性・社会性と社会・個人の幸福・美しさ（対 醜さ）の実現
 自敬（self-esteem）と他敬（respect for others）
 他人の共感（empathy-empowerment）

かつてソビエトは収容大帝国でしたが、その現象はアメリカに移りました。各OECDの国々によって、アメリカの超収容政策に対する批判が相次ぎましたし、揶揄が相次いだのであります。こういう大理論というものを立てても、どこまで本当か分からない、もっと地道な対応というものが要だということになってまいりました。大理論は、ウィルソンも言っていたように、あって悪くありません。それも一定の、大きな、天気予報ぐらいの役割を果たしますから。しかし、そういうのは、実は気象庁に申し訳ない、そのぐらい犯罪の大理論というのはおかしいんだということを、ウィルソンが時に触れて言うのです。おっしゃるとおりだと思います。

今まで大理論として挙げられてきたものには、ここに掲げましたようなものがございます。1938年に、セリンとマルトンの文化の衝突が犯罪を生むという理論。これもみんな、まことしやかであります。高気圧と低気圧がここに来てどうしてこうしてと、誠にそのとおりであります。ところが、個別的にはそれでは対処できません。どうしたらいいのかという問いに、われわれは向かわなければなりません。

その次に、今度は、サザランドのラーニング・プロセス・セオリーという、学習プロセス理論というものが出てまいりました。それから、シカゴ学派のショーとマッケイの、体をなさない社会が犯罪の元だという、ディスオーガナイズ・ソサエティという理論が立てられました。その後、ベッカーの、人に、これは犯罪者だというふうに名指しをしてラベルをぶら下げるのがみんなを余計に悪くするというようなラベリング・セオリーというものが出てまいりました。これで随分世界は振り回され、それなりの成果を収めて終わりました。

それから、今ここにおられる少年関係のことを実際にやっておられる方々は、日本で何かというとハーシュと言われますが、ハーシュのいわゆるソーシャル・コントロール・セオリーというものが生まれてまいりました。そこでは、ソーシャル・ボンドとかアタッチメントが大切だと言われました。これは当たり前のことです。しかし、それを具体的に、具体的な場所で、具体的な人に対して、どうやって、どういうふうなことをすればいいかということが明らかにされていないわけです。

Ⅱ 経年研究を中心とする発達理論（社会心理学、精神医学）による

トリートメント・サービス・プログラムの成功

さて、そこでわれわれは、こういう立派な大理論（グランド・セオリー）、それから刑法における大理論、それから哲学の大理論を前にしながらも、われわれの過去の蓄積は蓄積として、そこから離れて、それを基礎にしながら次へ進まなければなりません。われわれは、常に人間は変化して動いていくものですから、過去に対する尊敬はしなければなりません。過去にこだわっていたのでは、過去の人々が常に正しいのだと考えていたのでは、世の中は動きません。われわれよりはものは知らなかったはずですし、長くの歴史を知らなかったはずですから。われわれは、それをただありがたいと思うだけで事を済ましていたのでは、われわれの責任は果たしていない、ということになるのだと思います。

さて、そこから何十年にもわたる社会の場所と、それから個人というものの変化というものを具体的に捕まえていく、そういう地道な研究がおこなわれるようになってまいりました。

一定の問題がある人たちに対して、その人たちをどういうふうに扱ったらいいのか、普通のところに戻すのにどうしたらいいのか、どこに問題があるのか、というプログラムをつくります。そのプログラムをつくって、ある部署でやってみます。それをやっていないところと両方を比較します。そしてずっと長いことやっていきます。その結果、大きな、有意的な差が生まれたか生まれなかったかを、統計学的に分析していきます。その結果、有意差が大きかったものを少しずつ組み合わせあって、新しいものを、日々取り替えてつくっていき、事に対処するというやり方を考えなければならなくなってきましたし、またそう考える考え方が生まれてきたわけであります。

それにはデイビット・フェアリントンという、非常に優れた資質と努力と、それから、自分たちの学問や研究を人々に伝える能力を持った稀な人物が、ケンブリッジから生まれました。この人を中心として、英米で多くの研究がおこなわれていくことになったのであります。

幾つかの、われわれがランドマークとすべき著作が出てまいりました。一つは、レイバーとフェアリントンの——これはアメリカ人とイギリス人ですが——1988年の『深刻で暴力的な犯罪をおこなう少年』という本であります。第2番目は、やはりレイバーとフェアリントンが2001年に編んで出しました、『子どもの非行：発達とそれに対する処遇』という、そういう書物が出されました。同じく、フェアリントンとウェルス——これはアメリカのミネソタの大学の先生ですが——、彼らは、「子どもを犯罪の生涯から救おう」という論文を一緒に書きました。多くの人々がそれについて具体的なプログラムを出して論文を書いております。それから、2008年にはレイバーとそれ以外のいろいろな人々が一緒になりました、『あしたの犯罪者』という論文集が出ました。最後に、非常に親しくさせてもらっているハーベルさんの、『少年非行の予防と減少』という立派な書物が出ました。これが、今、われわれの分野で、今日お話しする分野でランドマークになる論文集でございます。

ここにかかわっておられる世界の人々の数は、学者、研究者、もう、優に5,000人を超えています。実務家の方々を加えると、何万人という方々がこれに加わっておられます。着実に具体的なプログラムを立てながら、どのプログラムがいいかということを交換し合って対話をしておられます。

1) < 犯行・非行一動機（行為者側） > × < 周辺、文化・社会、相互状況（条件） >

さて、人間は必ず発達していくのですが、その発達段階で健全に発達していった、非行をおこなわないような人々が全部になればいいのですが、デュルケームが言うように、そうはならないです。どちらかに問題がありますから。だって、初めて来た人ですからね、子どもというのは。そういうことをよく考えてあげなければいけないと思います。よその星から来た人ですから。ほら、外国人よりもっと違った人です。その人たちをどうやってわれわれのなかで迎え入れるかというのは、真剣に考えなければいけないことなのに、俺の息子だから、俺の娘だから、どうでもいいんだとか、言えばそのままついてくるなどというふうに考えるのは、相当に無責任です。そういう人々で、しかも日本はこれから子どもが少なくなりますし、その子どもさんたちに私たちは支えてもらわなければなりません。その人たちの幸せというものをわれわれは一生懸命用意して、つくっていかねばならないはずであります。

さて、江戸の終わりごろのことを外国人がどう見たかという目から、『逝きし世の面影』という渡辺京二さんの、多くの人々に読まれた優れた書物があります。そのほかに、たまたま私が手に入れたものには、当時イギリスからやって来て、非常におてんばな娘だったブルスンが書いた日本や朝鮮や、それからチャイナについての叙述をしたものがございますが、そのなかで、日本というところへやって来て、こういう社会を西洋化していいのだろうかという自問自答を皆さんがされたのが、日本という国の現状だったのです。そこで一番彼らが見て驚いたのは、子どもがいかに大切にされ、子どもがまちをどれだけ悠々と使っているか。

イザベラ・バードが、馬車で紀尾井町辺り——今の紀尾井町ですね——辺りからずっと川口のほうへ向かって進んで行ったときに、道を通るのをふさがれた。子どもがそこで遊んでいるから進むことは許されない。子どもの一番の長が「通っていいよ」と言って、初めて通ることができる。子どもは自由にそのまちで、自分たちで仲間になりながら一緒に楽しく生活をしている。そこからくる日本人というのは、ふんどしをはいて、体は真っ黒。しかし、いかに知的で、上品で、礼儀正しいことか、と。こういう人間は見たことがない。こういう叙述がずっと、もうあらゆるところに出てくるのです。東北の奥のほうまで行きますし、それからまた朝鮮は、ずっと漢江をずっと上って行って、周りをずっと見て歩いている紀行でありますけれども、そういうなかで、日本が大変に子どもを大切にす国で、治安がよくて、安全で、礼儀正しい国であるかということを、西洋人は見ておりました。日本を西洋流に変えることは間違っているのではないかというふうに、みんな書いているのです。

だけど、当時の事情としては西洋化せざるを得ません。そうでなかったら日本は侵略されます。したがって、われわれの先輩たちがやったことを否定するわけではありません。仕方がないからあんなったのです。ところが、われわれ研究を始めている人間の心まで、全部日本のものを失って西洋化されてしまったら、日本に残されたものを人々に伝える人がどこにいるのでしょうか。それを、80歳になってようやく気がつくこのバカが、ここで今話しています。

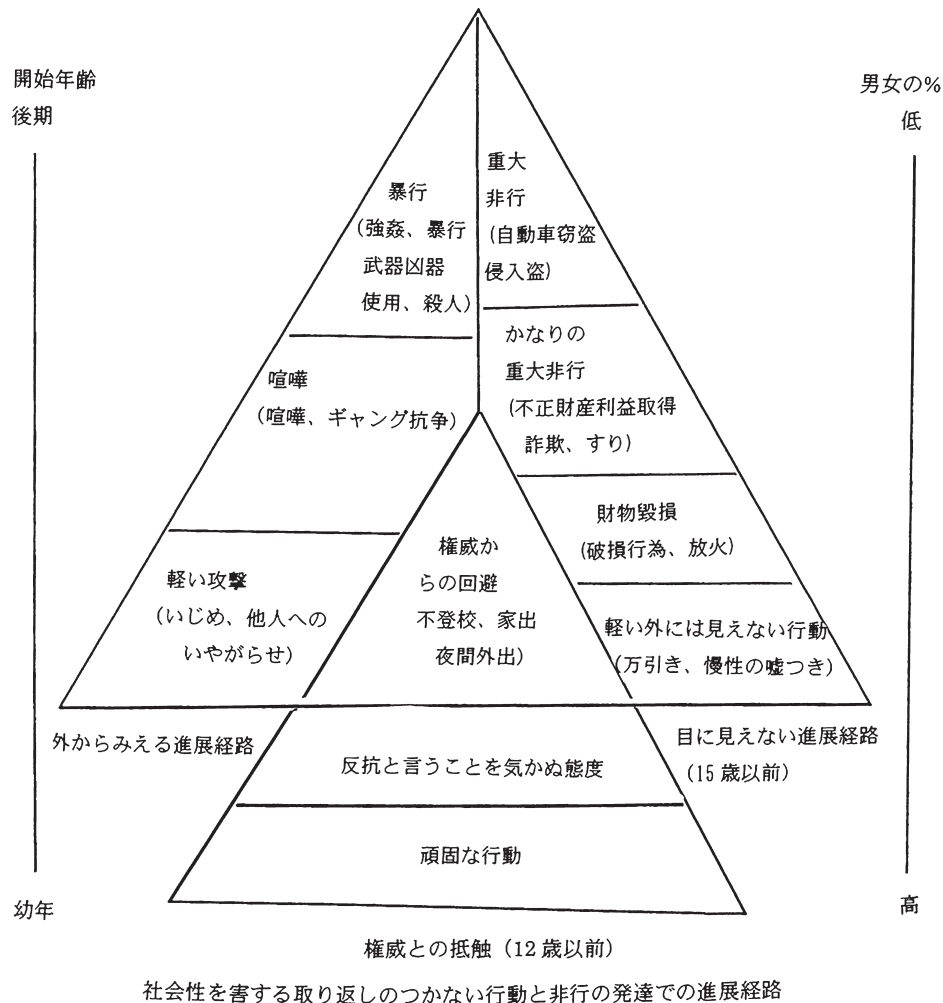
ところで、いろいろな要因が働いていきますけれども、その場合に働いていく要因として、発達段階にあって、どのように動いていくかということを見ていくときに目をつけなければならないのは、人間というのは人と人との交わりで生きている、いわゆるソーシャライズされて生きているということになります。「アンタイソシアル」という言葉を使いますが、あれは、「反社会的」という言葉を使うのは非常にまずくて、むしろ人間と結びつくことがうまくないということです。反社会的だったら、「アゲインストソサエティ」です——あるいは、「アンチソサイエタル」という英語を使うので——、「アンタイソシアル」というのを反社会的というのは少し大げさに過ぎると思います。

そのように、人間はお互いに社会化して、お互いにつながり合っていくことによって生きています。そういう人間になっていくのに、いい要件と悪い要件がたくさん働いているということでありまして、その点、資料1を見ていただきますと、人間が生きていくときに、家の中での行動が真ん中にあります。家庭の中の行動が。外の行動のなかで、外から見て分かるものと、それから、目に見えない領域での重大な犯罪に至る道筋と言いますか、経路がこのように描かれています。これ

は、レイバーのあの書物の中から引いたものでございます。

1人の子どもということを言えば、こういうものからだんだんだんだん上に上がっていきませんが、他方で、見えないところと見えるところで、最後にこういう重大な非行に至る。その前の段階で見つかったら、その段階でうまく、そういう人がそうならないようにみんなで協力していけば、こういう結果にならないという図でございます。

資料 1



Loeber, R., Wei, E., et al. "Behavioral Antecedents to Serious and Violent Offending: Joint Analysis From the Denver Youth Survey, Pittsburgh Youth Study and the Rochester Youth Development Study", *Studies on Crime and Crime Prevention* 8 pp.245-263.

※この姿はシカゴと全米での調査でも証明された。

Tolan, P.H., & Gorman-Smith, D., Development of Serious and Violent Offending Careers, in: Loeber, R., & Farrington(eds.), *Serious and Violent Juvenile Offenders: Risk Factors and Successful Interventions*, Thousand Oaks, CA, SAGE.

この図はアメリカでつくられました。最初はシカゴでつくられて、ほかの都市でつくられて、修正されながらアメリカ全土で修正されてこういうものができました。われわれも日本でできれば、どのような道筋を通して日本の子どもたちがうんとひどいところへ行くのかということをつまえることができれば、それに対する対応は、かなりの確におこなわれることになるだろうと思います。

資料 2

7大結果のリスク要因

リスク要因	結果						
	行動上の問題	学校不適合	身体不健康	身体障害	(虐待)暴力	妊娠	薬物使用
共同体							
貧窮近隣	×	×	×	×	×	×	×
社会性を高める政策不足	×	×	×		×	×	×
学校							
質の低い学校	×	×	×		×	×	×
仲間・友人							
友人からの悪い圧力	×	×	×			×	×
友人の悪いモデル							
仲間入りの拒否	×				×		
家庭							
低社会層	×	×	×	×	×	×	×
親の精神障害	×	×	×	×	×	×	×
叱り付ける子育て	×	×	×	×	×		×
個人							
早期の問題開始	×	×	×	×	×	×	×
その他の分野での問題	×	×	×	×	×	×	×
その他							
ストレス	×	×	×	×	×	×	×

心の問題（mental health problem）と少年対応法運用制度

矯正施設と矯正プログラムでの少年の約 65%～75% 心の問題あり 内 25% 重篤

全人口の 20% 少年裁判所の保護観察に付された者の 45% 心の問題と薬物使用

薬物使用は女性（約 80%）が男性より高い（67%）

心の問題の MS（多くの施設分野）での統合集計によるガイドライン作用と普及が重要

Howell, James C., Preventing and Reducing Juvenile Delinquency (2nd ed) p66.

それから次に、どのような危険要因があるか、資料 2 を見て下さい。それは、自分の住んでいる周り、それから学校、それから仲間、家庭、自分自身、そのほかにいろいろ分けられますが、ここに挙げたようなところ、×印がついているところで、それぞれ危険要因が見つかるわけです。

次に、今度はそうさせないようにするための要因（防御要因）がどこにあるかというのは、資料 3 を見てください。これも、ハウルさんの表を使わせてもらっています。この人は OJJOP というアメリカ全土の少年非行と健全発達を考えるとこの事務局長だった人です。今はノースカロライナで研究所を開き、多くの人と研究しながら、時々外国人であるわれわれと会合を持って、一緒に話をしながらこういうものをたくさん出してくださっている方です。

危険要因は、コミュニティと、学校、友人、家庭、個人であります。もう一つはやはり全体として州政府なり国家の政府なりが、社会性を高めるための政策についてトンチンカンなことを多くやると、それが一番大きな原因の一つであります。やはり、実際の調査に基づいて、これが重要だということに目を向けてやらなければなりません。一つ一つの寓

資料 3

7 大結果の防御（プロテクティブ）要因

分析レベル	結果						
	行動上の 問題	学校 不適合	身体 不健康	身体障害	虐待	妊娠	薬物使用
共同体							
社会化への規範	×	×	×	×	×	×	×
社会性を高める政策充実	×	×	×		×	×	×
学校							
質の高い学校	×	×			×	×	×
仲間・友人							
友人の良いモデル	×	×		×		×	×
家庭							
親子の良い関係	×	×	×	×	×	×	×
個人							
個人の能力と社会性に資 するモデル	×	×	×	×	×	×	×
自分を活かす能力	×	×				×	×
その他							
社会化を助ける支援	×	×	×	×	×	×	×

※ 社会化を助ける支援は全てのレベルにあり、親、仲間・友人、教師を直接、間接に助けることになる。

※ 上掲の Howell による。

＜リスク要因についての重要な着目すべき点＞

（6 歳－11 歳については）

 後の深刻な犯行や暴力的犯行についての最良の＜予測因子＞

 低年齢での非行（全犯行）への関与

 ＜第二の最良予測因子＞は、貧困家庭（低社会層）の社会化できない親のもとで生活している＜男の子＞

（12 歳－14 歳のエイジグループ）

 ＜社会性や社会性につながる＜結びつき＞の欠如と社会性に反する仲間＞

 これが最良の＜予測因子＞

Lipsey and Derzon (1998) からの引用。Predictions of Violent or Serious Delinquency in Adolescence and Early Adulthood: A Synthesis of Longitudinal Research, in: Loeber, R., & Farrington (eds.), Serious and Violent Juvenile Offenders: Risk Factors and Successful Interventions, Thousand Oaks, CA, SAGE.

話とか、発表された恐ろしい報道の事実というものを捉えて、それだけで対処しますと、多くの場合誤るわけです。

これは、われわれ研究者仲間の言葉ですが、メディアと、それから政府はあんまり信用するなと。民主主義国においてはどうしても選挙がありますから、あるところまで研究者や役所で積み上げていったものを、最後では、どこか、何とかしなければならぬものが出てまいります。それからメディアは、自分たちのものを売るのが商売ですから、したがってそこで挙げられているものが真実であるとは限りません。彼らは、もちろん、嘘は書きませんよ。だけど、本当に捉えるべきものがみんなに伝わっていません。

犯罪に関するドキュメンタリーなどを見ますと、いいものがありますよ。最近オウムに関する NHK の部隊がやったドキュメンタリーが文藝春秋から出ましたけれども、これなんか非常にいいものです。ところが、ほかのものだときわどくで見られたものではないものがあります。そこに友人や知人やいろいろいますと、——いつも「また先生」と、よく言われますけれども——よくもこんなもの書けるなと、こんなもの放映できるな、ということをよく言うのです。もう少しまじめに考えろと言うのですが、「僕たちまじめにやっています。私たちまじめにやっていますよ」というふうにおっしゃいます。だけど、そこでまじめにやるというのが、どこでつくられたコードなのか、どこでつくられた規範なのか問題なのです。

2) 犯罪・非行因果関係論 (etiology) に基づく現実分析

世の中には、ある行動のルールズによって出来上がっている一つのまとまりがございます。これを制度、インスティテューションと申しますが、これは、制度化されて人間の行動が一つの目標に向かって一つになっているという、インスティテューショナライズされているものを言うわけですが、それが幾つもあるわけです。その幾つもあるなかで、対立が起こります。その対立をどうやって調整するかというのが一番難しい問題です。発達の段階で子どもが衝突するのはそのためです。子どもにとって最もいい方法をわれわれは考えなければならないということになるのだと思います。

それで心に抱かせるものは、自敬と他敬です。セルフエスティームと自尊の意識。天上天下唯我独尊です。お釈迦様は、一人一人みんな大切なものだよというふうにおっしゃったわけですが、そのとおりです。それと同時に今度は、他人と一緒に社会化していくためには、他人に対する尊敬というものを基本に据えなければなりません。この2つが本当にあればうまくいくのですが。

それから、他人の行動や生い立ちや住まい方に対する共感、同情というものがなくてはいけないのですが、なかなか人間はそうはいきません。それに対する障碍をどうやって一つずつないようにしながら進めていくかということが問題になります。例えば、誰々さんと誰々さんがどこどこでけんかした、誰々さんは何で離婚したというのが記事になって売れるわけです。それがその人に対してどれだけの決定的な打撃になるかということを考えないで。そこが非常に難しいところです。

Ⅲ 他人への不安感（体感治安）を生む行動（＝ antisocial）の予防

ところで、人は、いろいろなところで生活しますが、たくさんのところで生活します。自分や家庭や近隣や学校、共同体、それぞれに相応してサービスの機関があります。これを全部まとめて、全部のシステムが一緒になって健全に育っていくための扱いというものを多システムが一体となった個人及び社会に対するセラピー（MST、マルチ・システムミック・セラピー）というふうに申します。これは一つのブランドです。このブランドを京都へ持って来て、日本へ持って来て、どういうふうに変わったものにするかという、ジェネリックなものにするかというのがわれわれに課された大きなテーマであります。

先ほど京都の塚本副市長がおっしゃった、一体となるというのが、英語では、「システムミック」という言葉です。「マルチシステムミック」は、たくさんのものがありながら、それが一体となっていく、そして、一つのものに対応するという意味ですが、こういう制度が非常に重要であることが分かり、それを組み立てるためにはどうしたらいいかということを考えてまいりました。

われわれの場合にも、警察があり、保健所があり、児童相談所があり、少年家庭裁判所があり、少年院があり、種々のものがございます。少年や犯罪者に対する更生保護施設もございます。保護司の方々もおられます。近隣の方々もおられます。それらの方々が、ただ単に研究された知見で、これは効果がある、これは危険なもので、これを除いてこういう方法でやったほうがいいのかというふうに考えて、実践しながら、何回も繰り返して、いい、悪い、いい、悪いと言いながらまとまって、いいプログラムをつくりだしていくことが地道な研究であるということになると思います。

研究しているものは常に黒子でありますし、問題を解決する行政の力も警察の力もみんな黒子です。本当の主役は、社会一人一人のメンバーです。それらの人々が大きな力を発揮してくれることによって、われわれはわれわれの社会を次に引き渡すことができます。自分の仕事をするということよりも、子どもたち——今日のテーマがそうですが——子どもたちに優れた役割を果たしてもらいように、どんな子どもにも目を差し伸べる、手を差し伸べる。そのためにどういう方法をおこなったらいいかということの一つ一つを考えていき、子どもを傷つけないようにするにはどうしたらいいかという

のに目を向けなければなりません。このMSTという手法を京都でどうやって取り入れたらいいかということを考えなければならぬと思います。

場所についての経年的な研究というのは、将来的には、統計的な処理をするという方法を取って、また新しく資料を集めていくことにしまして、京都の場合には、過去に、地域によってそれぞれ非常に優れた独自の方法を取っておられますし、地域によって違います。その違いを、場所の経年的研究をすることによって、どうしてこう違っているのかと、それぞれのところでどういう問題を抱えているのかというのを、統計的に経年研究をやってみる。将来に向かってどういう変化で、どのようにやっていったらいいかというのは次に、また地道に研究していくというような方法を取ることができると思います。

実際社会でも、場所についての、これは犯罪が非常に起こりやすい渋谷とか何とかそういうところですが、そういうところもそうですし、普通のところもそうですが、どこでもみんな違うはずなのです。東京で、原宿と渋谷と新宿とどこどこというのは、京都の方は同じかとお思いになるかもしれませんが、まるきり違います。日本へ来てから相当長く東京に住んでいるものとしては相当に違うことに気がつきます。それを直すのにはどうすればいいかというのは、それぞれの場所ごとに違った目を向けなければなりませんし、その場所がどのように変わってきて、どういう特質を今持っているかということをはっきりと明かにしていかなければなりません。そのためには、みんなが一緒になっていかなければいけません。

アメリカの場合ですと、警察よりも、「タウン」というのは「村」のことですけれども——いつか間違えては「タウン」を「まち」と訳した人がいるようですが、タウンというのは日本で言えば村です——村には村の集まりがあって、村の、みんなが集まった行政単位があります。そこが一番中心的に活動しています。

日本の場合は、いろいろないきさつがありまして、駐在からだんだんと発展してきたもの、それから近代的なもの両方を、川路大警視というのがうまくまとめられて、日本では、私が大学に入る前までに経験したのは、駐在が警察の中心でした。この駐在というのがどれだけ大きな役割を果たしていたか。駐在は、そのまちの町長さん、それから幾つかの学校の校長先生と一緒に並んで重要な役割を担っておられた方です。結婚式といえど必ず3人おられて、そのなかの1人は駐在がおられました。こういうような役割を十分活かしながら物事を動かしていくことを考えると同時に、ここに挙げました非行、暴力へのリスク要因は、注目すべき要因は何歳から何歳までというので、こういうようなものがございます。これはお読みいただきたいと思います。

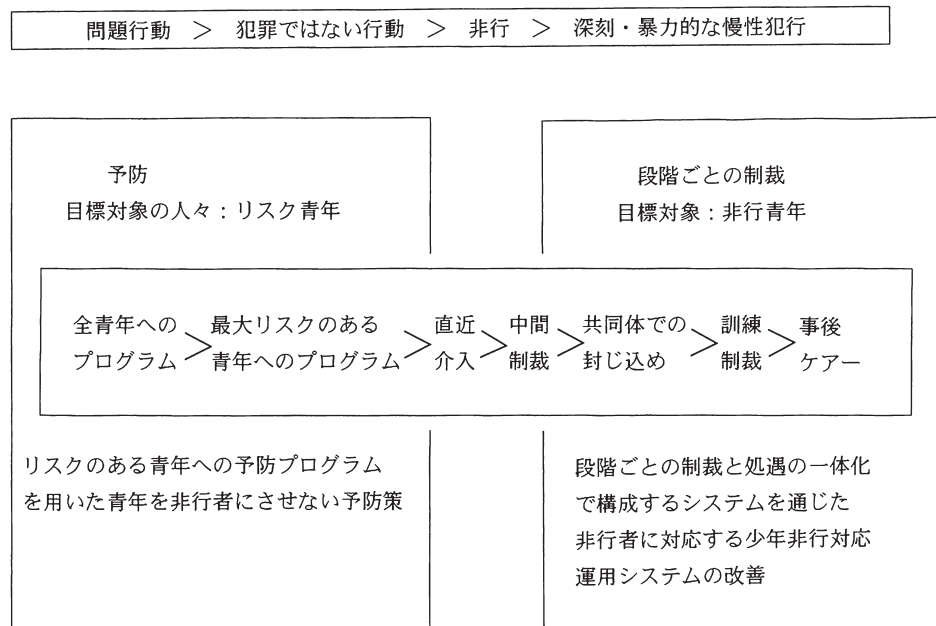
資料 4

非行と暴力へのリスク要因

< 0～3 歳時 >	
児童	1) 妊娠時と出産時の諸問題、2) むづかしい気性、3) 多動、衝動、注意力の欠如問題
家庭	1) ティーンエイジ・マザー、2) 母親の妊娠時の薬物、飲酒、喫煙、3) 母親の「うつ」、4) 親の薬物使用、5) 親子のコミュニケーション不足、6) 貧困、低社会層、7) 深刻な夫婦抗争、不適合
< 3～6 歳 >	
児童	1) 攻撃・衝動的行動、2) 虚言癖、3) リスクを取る行動、人さがせな行動、4) 罪の意識と共感不足、5) 知力不足
家庭	1) 厳しすぎる、常軌を逸した「しつけ」的な行動、2) 児童への不適切な扱い（虐待、無視）
< 6～12 歳 >	
児童	1) 非行一般へのかかわり、2) 社会化に反する考えや非行の考え、3) 攻撃性、4) 行動過多、5) 年少時から引きつづいている、直らない、社会化しない行動、6) 心理条件、7) 医療と身体条件、8) 社会的なくつながり不足（社会化を助ける活動や人々間での人気のある活動への不参加）、9) 家庭、学校、社会のあり方などの権威との衝突、反抗、頑固、衝撃性、社会性を害する欠陥、行動欠陥、10) 暴力行動の開始時期が早いこと、11) 被害を受けた経験と暴力状態に晒されていること、12) 「いや」と言えるスキル不足、13) 薬物使用（特にマリワナと飲酒）
家庭	1) 虐待する両親、2) 低社会層、3) 社会性をもたない両親、4) 兄弟姉妹の社会性を害する行動、5) まずい親子関係、6) 両親の監督、管理、目配りと子どものありかたのまずさ、7) 家庭暴力（子どもの虐待、パートナーへの暴力、家庭内不和）、8) 崩壊家庭、9) 親の暴力を認める傾向
学校	1) 小学校での成績不足、2) 不登校（停学は小学生にはまず無い）、3) 学習能力不足、4) 十分に組織化されていず、機能していない学校、5) 学校への愛着不足、6) 学業嫌い
友人・同輩	1) 仲間拒絶、2) 非行に走る仲間との結びつき、3) 攻撃性のある仲間との結びつき
共同体	1) 低層又は問題をはらむ、うまくいっていない近隣への住居、2) 凶器の存在（日本ではない）、3) 薬物が手に入りやすい状態、4) 近隣での体感不安、5) 近所づきあい不足、6) トラブルを抱えた子どもの多い近隣
< 12 歳～16 歳 >	
思春期の子ども	1) 社会性のある結びつき不足（社会性を助ける活動や人気のある活動への不参加）、2) 非行一般への関わり、3) 薬物取引、4) 身体への暴力と攻撃性、5) 暴力の被害体験、6) 精神衛生上の問題、7) 行動欠陥、8) 年少時での異性とのデート、9) 性知識の無い段階での性交渉と年少時で父親になってしまうこと、10) 社会性に反したり、非行に走る考え方、11) 「うつ」、12) 生活上のストレス
家庭	1) 親子間のコミュニケーション不足、関係不良、2) 社会性を欠く親、3) 崩壊家庭、親子の別離、4) 低社会層又は貧困、5) 家庭の非行や犯罪歴、6) 兄弟姉妹の非行、7) 若年の母親、8) 子どもへの愛情不足、9) 親も監督、管理、モニター不足、子どもの扱い不良、10) 親の低学力（歴）、11) 子どもの扱い不良（虐待、無視）、12) 家族構成の変遷（親の交代等）
学校	1) 学校での態度と成績、2) 学業成績不足、3) 不登校、退校、4) 頻繁な転校、5) 子どもの高学歴へ進むことへの親の関心不足、6) 数学成績不良（男性）
友人・同輩	1) 社会性に反する行動による同輩、2) 非行仲間との結びつき、3) 攻撃的な仲間との結びつき、4) 仲間の薬物使用、5) 不良グループ
共同体	1) 犯罪を容認する共同体のしきたりと規範、2) 貧困、3) コミュニティの劣化、4) 近隣での薬物使用と入手の容易さ、5) 暴力と人種偏見の強さ、6) 犯罪多発の近隣、6) 凶器入手の容易さ（日本にはまず無い）

資料5

重大・深刻で暴力的な慢性の少年犯への包括的戦略



Wilson, J. J., and Howell, J. C. (1993). A Comprehensive Strategy for Serious, Violent, and Chronic Juvenile Offenders. Washington, DC: Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention (OJJDP).

IV 深刻で重大で暴力的で慢性的な非行・犯行の進行の予防

最後に、重大・深刻で暴力的な慢性の少年に対してどう対処するかというと、最初からそういう子はいませんから、だんだんだんだんそういうところへ行くわけですが、そういうところへ行く段階に応じて、それに対する扱いの仕方は、病気が慢性でない状態から慢性に至るまでに違った対処があるのと同じように、対処の仕方に区別を設けなければいけません。段階的な対処をしなければいけません。一番最後には捕まえるということが必要になりますけれども、最初の段階でそういうことをおこなうことは、むしろ逆の効果を生むことは明らかです。われわれの場合にも、どういう方法を取ったらいいかということを十分に計画を立ててプログラムをつくっていかなければならないということになるかと思います。

V 総合・統合研究、MTS による知見に基づく非行・犯罪予防

抑止、事前対応のシステム＝Criminal Justice（マイクロ犯罪学の応用）の充実した改善

こういう地道な研究というものを十分つくり上げていった結果、この研究の成果を実験的に及ぼすという活動が警察活動です。そういう研究の成果を受け入れてもらえるようにするために警察官に研究所に来てもらう。そして警察官がそこから出て行って、活動をされて、その成果をまたこちらへ持って来てくださる。こういう活動は、オランダでは、もう通常一般的におこなわれていますし、ケンブリッジでは実験されています。今日おこなわれています世界の犯罪学会で——ストックホルムで会議をやっていますが——ストックホルムでもそういうものを用意しています。現在では、そ

これらの国々では、ポリシーシングにかかわる方々、ここに挙げた児相の方々も含めてですよ、われわれも含めて、これが、一つのプロフェッションになる。一つの職業になる。非常に評価をされる職業になる。そして内部で評価ができる。それぞれが研究をし、その研究成果が外部に持って行かれる。外部でその研究成果や活動がそのまま高く評価される。こういうのをプロフェッションと言います——最近われわれの分野の、法曹のプロフェッションの評価は下がっていますけれども——警察のプロフェッションというものを実際につくり上げていくようなことをしていくことが非常に大切だということが分かってきているのでございます。

3つの重要なことをここで申し上げますと、共同体や個人のニーズを必ず活かして対応すること。それから、責任体制をきちんと確立すること。それから、みんなで一緒に連携を組むこと。この3つが一番重要なことですが、そのためには、皆さん方と一緒に、京都なら京都にふさわしい、そして日本なら日本にふさわしい、何が、どういうプログラムかというものをつくり上げて、だんだんと試行錯誤しながら使ってみて、成果が上があれば多くのところで使っていただくと、こういう活動をしななければならないと思っております。そのために、ごくわずかな努力をこれから重ねようと思っておりますので、皆さま方のご協力を心からお願い申し上げます。

レジュメ（部分）

- Ⅲ 他人への不安感（体感治安）を生む（＝ antisocial）行動の予防
 - 社会・共同体の健全さと幸福感の向上
 - 個人側（動機）× 共同体・社会側（周辺事情）
 - 心理学 × 社会学
 - <発達過程のドメイン（周辺・レベル領域）>
 - 多システム・セラピー連携、MST
 - 個人、家庭、近隣、学校（保育、幼稚園）、共同体、
 - 社会サービス機関（含 警察、保健所、児童相談所、少年・家庭裁判所）の連携
- Ⅳ 深刻で重大で暴力的で慢性的非行・犯行の進行の予防
 - この犯行者目標 ー段階的政策、トリートメント
 - サービス・プログラムの開発（FFT（効果的な家庭のセラピー）保健師、学校、家庭の連携）
 - ◎ 反省点ーまだ到達していないもの
 - 軽微段階での事前サービス＝社会性促進要因の発見
 - 段階的サービス、制裁計画を考える
 - 周辺事情の改善、公衆衛生の見地（疫学研究）等
 - リスク、プロテクティブ、とりわけリスク要因の発見、原因等
 - 社会性促進要因の発見は不十分
 - ー共感プログラム、アウトリーチ・プログラムの開発
- Ⅴ 総合・統合研究、MST による知見に基づく非行・犯罪予防
 - 抑止、事前対応のシステム＝Criminal Justice（マイクロ犯罪学の応用）の充実した改善
 - ポリシーシングの改善、ポリシーシングと他の社会化の活動との連携、
 - <個人、共同体のニーズへの十分な対応> responsiveness
 - <多層的な共同体から社会、国家のルールズの組織＝法による支配> rule of law
 - <責任体制の確立> accountability
 - 住民参加とニーズへの適切な美しい対応
 - Criminal Justice System の改善、一貫した展開
 - （自助、共助、公助）sense of ownership × system